



会議レポート

会誌編集委員会女子部～番外編！～報告^{☆1}

FIT2014 が、2014 年 9 月 3～5 日に筑波大学 筑波キャンパスにて開催されました。FIT2014 の参加者は 1,178 名でした。例年 1,500 名前後とのことで、今年は少し少なかった印象です。

さて、今年度から編集委員の女性陣が増えたことをきっかけに 7 月号から「会誌編集委員会女子部」による連載コラムが始まったことはみなさん記憶に新しいのではないのでしょうか。今回は初の試みとして、女性編集委員によるパネルディスカッション¹⁾を企画し、女性研究者の研究生活や日常、仕事場での出来事などを中心に、会場のみなさまも含めて自由に語り合うという趣旨のイベントを行いました。最初に各パネリストから、ポジショントークとしてそれぞれの研究やキャリアについて 10 分ずつプレゼンをした後、自由に会場の聴講者と討議するという形式で、あっという間の 2 時間でした。本稿ではその内容を報告させていただきます。

なぜ「女性研究者」を目指したのか

私は学振研究員ですが、パネリストは大学教員を始め、企業で働く研究者、自身の会社を起業した代表取締役社長、などなど、一口に「女性研究者」といっても多種多様なキャリアをお持ちの方々です。なぜ、みなさんは専門職を目指したのでしょうか？

■算数好きな興味津々な女子。教えることが好きだった

上智大学の高岡詠子先生は元々算数好きな女子だったそう。しかも、興味の対象は算数だけにとどまらず、どこに行ってもあらゆるものに興味津々で、周りの大人たちを驚かせていたようです。大学院への進学の影響は「大学院で修士論文を書きながら私を産んだ母の存在」とおっしゃっており、理系に進むのも、大学院へ進学するのも自然な流れだったそう。

「昔から教えることが好きだった」ということもあり、e-learning 教材を 100 本くらい作られたり、ブルーバックシリーズの本を書かれていたり（『シャノンの情報

^{☆1}本稿の著作権は著者に帰属します。

理論入門』『チューリングの計算理論入門』。放送大学でも「情報科学の基礎(2007～2012)」「計算事始め(2013～現在放映中)」の科目を担当なさっています。

本会誌の中でも、情報教育に対する関心の高まりを反映して、教育に関係するコラム・記事・解説を掲載する教育コーナー『ぺた語義 (<http://www.ipsj.or.jp/magazine/peta-gogy.html>)』を立ち上げられ、会員以外の人でも無料で読める人気コーナーの 1 つです。「未来の社会を担っていく若者を育てることで大きな可能性に向かって貢献したい」という夢を話してくださいました。

■もう一度海外で研究をしたい

オンライン秘書サービスを提供する(株)シンクフェーズの辻田眸さんは「研究が楽しかった。より困難そうな道を選んで自分を試してみたかった」と博士課程への進学を決意したそう。米国ジョージア工科大学へ客員研究員として留学をした 1 年間はとても楽しかった上に、海外の女性研究者の活躍を目のあたりにしたことで、ますます研究への意欲が湧きたったそうです。

そして、「もう一度海外で研究をしたい!」との強い思いから、研究者としての道に進むことを決めたとのこと。この日の聴講者に向けても「自分を違う環境に置くことで自分の考え方が変わることも多いため、海外留学をお勧めしたい」とメッセージを送っていました。

博士号取得後、大学に残って研究、企業へ就職、起業・・・などさまざまな可能性の中で、まずは大学で研究員として働くという選択をした辻田さん。一方で、その間に妊娠・出産を経験したことで、子育てと仕事とのバランスを考えるようになり、「自分でスケジュールをコントロールしたい」と、一念発起して起業をすることに。

もちろん起業に迷いはつきもの。辻田さんも起業する際は悩んでいたが、アメリカ人の旦那さんから、「まだ始めてもいないことをなぜ悩んでいるのか分からない。失敗はチャンスと捉えるべきだ」と応援され、踏ん切りがついたそう。それからは「何事も心配しすぎないことが大事。思い通りに行かないことが多いので心配しすぎても意味がない」と考えるようになったという。

「研究者の方々に支援したり、社会とのつながりが欲しい子育て中のママと積極的に連携したりして、さまざまな人を支援するような仕事をしたい」そんな目標を掲げながら、現在自身で立ち上げた株式会社の代表取締役社長を務められています。

■さまざまなアルバイト経験から見つけた今の職業

NTT ドコモの先進技術研究所で研究員として働く土井千章さんは修士卒で入社し現在 6 年目。自分に向いている職業を探すため、学生時代にはアルバイトとして、コンビニ店員を始め、塾講師やアプリケーションテストなどいろいろを経験を経たそう。「楽しかったお仕事ベスト 1 は司会・イベント MC でした!」とおっしゃる



パネルディスカッションの様子

姿はまさに“イベント司会のお姉さん”がとっても似合いそうな元気いっぱいの研究者。たくさんのアルバイトを実際に体験し、身近に肌で触れた上で選んだという「研究者」という職業。

「子供の頃に父に連れて行ってもらった学会で、たくさんの研究者の方が発表やデモンストレーションをしている姿を見て、研究者という職業って格好いいなと感じていたのが大きかったと思います」と語ってくださいました。

土井さんは自身が感じる研究者という仕事の魅力として

1. 自分の好きなことを追求できる
2. 新しい発見が多く、日々新鮮
3. 時間の配分をコントロールしやすい
4. 人との出会いが多い

の4つを挙げていました。

「私自身は修士卒で今の会社に入社したのですが、働きながら大学院に通い、博士号を取得するという選択肢もあります。実際に私の周りでも現在働きながら大学院に通われている方や入社してから博士号を取得された方もいらっしゃいます。博士課程へ進学するか迷っている方は、このような博士号の取得の仕方も選択肢の1つとして考えるのも良いかもしれません。また、出産や子育てについては、弊社の場合ですと出産休暇や育児休暇、育児のための短時間勤務等の制度があるので、これらの制度を活用して子育てをしながらイキイキと仕事を続けている女性社員がたくさんいます」

■数年先の女性研究者の姿に憧れて

そして、私自身はというと、学部時代のたくさんの先輩方のバリバリ頑張る姿に憧れて研究者を目指しました。女子大だったため、社会人博士の先輩や子育てをしながら博士論文を書く先輩、企業で研究をする先輩や、大学の教員になった先輩など、自分より数年先の女性研究者の多種多様な姿が身近にありました。そういった身近なロールモデルの女性との縦のつながりを作るために、先生や幹事の先輩が毎年同窓会を開いてくださいました。環境にも恵まれたのだと思います。

研究を進める上で大事なスキルは「コミュニケーション能力」

研究者は「研究」をするのが主な仕事なわけですが、そのために必要なスキルについて、会場から質問が出ました。それに対して、土井さんは「興味を持ったことにとどこまで乗り込めるかが大事」と挙げてくださいました。「細かいことを言えば、語学力やプログラミング力など必要なスキルは多々ありますが、研修やセミナーに参加したり、周りの先輩が教えてくださったり、会社に入ってからでも勉強できる機会がたくさんあります。ですので、あまり研究者という職業を敷居の高い職業と思わずにチャレンジしてみてもよいのではないかと思います」（土井さん）

一方、コミュニケーション能力が大事と挙げてくださったのは辻田さん。「同じ優秀な学生さんでも、学会で発表したり対外的な成果をたくさん出したりしている学生さんもいますが、研究室の中では認められているけど、なかなか対外的な成果につながらない学生さんもいます。違いは何かというと、完璧主義すぎて、自分で思っているところまでできるまで、ディスカッションをあまりしない学生さんというのはなかなか成果が出にくいように思います。たまにミーティングで発表してみると、先生と方向性が違ったり、それはすでにあるよ、ということがあったり。なので、コミュニケーションをとるのは大事ですね。分野によるかもしれませんが、1人でやりたがる人が多い。分からないことはまわりの先生や友だちに聞いて、マネージメントできる人と一緒に作業ができる、という学生さんのほうが割と成果を出しやすかったりするのかな、と思います」（辻田さん）

また、情報収集面や仕事においても、人脈形成は重要だという意見が出ました。「特に、海外研究者とのつながりは情報収集の面からも重要です。海外研究者とのつながりを作るために、学会は最大のチャンス。レセプションや会議中のイベントなどに参加し、内輪で固まらないようにして、ぶつかっていきましょう。趣味の話、その国や日本の政治の話、文化、食べ物、教養などさまざまな話題を話し合うことで距離感も縮まります」（高岡先生）

「人脈形成力が大事だと思います。人のつながりから仕事やチャンスがやってくる。何かを成し遂げている人ほど、人をうまく取り込んで仕事をしているんですよね」（辻田さん）

それを受け、高岡先生は「ディスカッションはうまい人もいますが、できない人ももちろんいます。自分できないことを無理してやるよりは自分の特性を活かせることを考えてやっていくとよいと思いますね」と話してくださいました。

また、私自身が大事にしているのは「あるものを受け入れるではなく、どうしたらより便利になるか」を常に問いながら研究テーマを探すということです。新しいデバイスが発表されたとき、使ったことのないソフトウェアを使うとき、普段の生活…。与えられたものを使いこなすためにユーザ側が合わせるのではなく、よりよく使うためには、ユーザの創造性を発揮させるためには、こういった工夫があり得るか。研究テーマを探すときにはそんなことを考えるように意識しています。

女性研究者の方がマルチタスクに強い？

このように、さまざまなキャリア形成の可能性があり、大学だけでなく企業の中でも求められる研究者という職業。「女性研究者は近年確実に多くなっています」と話してくださったのは高岡先生。「女性ならではの視点というのは意外と自分たちでも気づいていないのです。自分の中で何かひっかかるものがあればそれを大事にしたほうがよい」(高岡先生)

また、会場からは、「男性より女性の方が優っていると思うことは？」という質問も出ました。「私は期限を決めて、この学会に絶対出さず、と思ったら、絶対に出していません。投稿を1回スキップすると、結局出せなかったりもする。学会ありきというのもよくないですが、スケジュールについては女子学生の方がうまいように思います。出す、と決めたら、他の人の力を借りてでも成果を出す(笑)。それはそれでよいことだと思いますね」(辻田さん)

「女性の方がマルチタスクが得意かな、という印象があります。何かをやりながら違う何かをする、というのが苦ではないのが女の人に多いのではないのでしょうか。論文を書きながら、違う研究のプログラミングをしたり、子どもの相手をしたり。もちろん、まとまった時間はほしいのはやまやまですが、細切れの時間でも比較的集中してできています。何か困ったときに、この分野のあの人に聞いてみようかな、という“人に頼ってみようと思うしきい値”が女性の方が低い気もしますね。結果として人を頼ったときのほうがよいサイクルにつながりやすいです」(五十嵐)

その他

会場からの質問ではその他にも、「女性にまず理系に進学してもらうにはどうしたらよいか?」「学生時代にプライベートやキャリアの人生設計はどのくらい立てていたのか?」といった質問が出たり、直前の魚群探知機の話を受けて「大きなマグロはどこで釣ったのか?(結婚相手とはどこで出会ったのか?)」といった質問が飛び出すなど、楽しく和気藹々とした雰囲気の中、イベントは終了しました。



左から順に、土井さん、高岡先生、加藤先生、五十嵐、辻田さん

「不安になっている女子学生はたくさんいるので、このようなイベントは非常に参考になると思います。特に女子留学生が増えていて、博士課程への進学を含めたキャリア形成や出産のタイミングなど悩んでいる女子はとて多いです」と、同じようなイベントを英語でもやってほしいといったコメントをくださった男性教員の方もいらっしゃいました。

最後に、今後取り組んでいきたいことを伺うと、高岡先生は「社会問題やニュースに目を光らせています。直接助けることはできないけれど、手助けとなるような教育・研究をしていきたいですね」、辻田さんは「女性向けの情報処理雑誌、付録など作ってみたいですね」と語っていただきました。

2015年3月に京都大学で開催予定の第77回全国大会では、これまた初の試みとして、「会誌『情報処理』公開編集委員会」が企画されています。お楽しみに！

参考 URL

- 1) http://www.ipsj.or.jp/event/fit/fit2014/program/data/html/event/event_B-5.html

(五十嵐悠紀/筑波大学)